

「審査講評」

農村を敷地に設定した今回のコンペ「場のオブジェ」ですが、難しいテーマだったと思います。審査員の期待としては都市からではなく、農村から発想された現代住宅を見たいという思いがあったのですが、今の若者には、肉体化された農村部の記憶は全くないか、あったとしても社会が均一化してしまった結果農村の記憶は薄まっていると感じました。そういった中でも、実際に建つことをイメージしながら、自分が住んだ時の生活の情景や時間の移ろいなど、興味を惹かれたものを最終的に6作品選ばせていただきました。

二反田さんの「たたずむ建築」は水田の上に立つコートハウスです。抽象的に自然を取り込む手法は都市的な発想ですが、この敷地は実際に霧に包まれることが多い場所ということもあり、パースで表現されたキリの中の住まいは美しいと思いました。

山根・渡部・上野・幸田チームの「ヒト屋根」は、屋根をかけた中庭を中心に、部屋ごとに勾配の異なる屋根でまとめた案です。母屋、離れ、蔵など複数の屋根がワンセットになって一軒の農家が成立している中で、一戸建てでも、バランスを保てるだろうということと、農家にみられる母屋と離れの間の半外部空間を住まいに包含しているさまが、農家の現代版解釈と受けとめました。

門田さんの「田園に浮かぶ農村」は、ストレートに住宅設計に向き合う姿勢を評価しました。中庭を中心にそれぞれの部屋がつかず離れずの関係で配置されている生活空間は伸びやかさを感じる住空間ができていて、この敷地環境に素直に調和すると思います。全体の空間プロポーシオンがとても美しく一番住んでみたいと思いました。

山田・長尾チームの「塔の家～やさしい光に包まれて～」は、中近東の乾燥地帯に建っているような土レンガ的造形で、この場所に建つとしたら特異な立ち姿になりそうですが、都市の喧騒を嫌い、静けさを求める住人の姿を思い浮かべました。最近訪問した宇野友明さんの「桑名の家」に共通する感覚を感じました。はじめて体験した窓のない家でしたが、この作品の室内に似た感覚を覚えるのかもしれない。

都田・林チームの「鈍の皿」は皿のような大きな屋根が特徴です。ロンシャンの教会や東京文化会館のソリを持った屋根を連想させ、最近は見ないコンクリート造形ですが、フラットルーフや切妻屋根とは違った深みを感じさせます。ガラス張りで周囲の自然を感じながらも同時に、昔の民家の茅葺屋根を内側から見上げるような空間の深さを感じる住空間ができるであろうことに惹かれました。

中村さんの「里山の彫刻」は部屋を仕切らず床の段差で場所をつくるワンルーム空間の作り方と、外部の景色を限定的に取り込む開口をつくるという二つの操作が、特徴的な壁の配置のみで成立しています。農村の中であって、この室内をイメージすると開放と囲まれ方の具合が程よくバランスが取られていて、心地よい室内が成立していることが想像できます。この内外

を調整する壁の存在がそのまま、建物外観を作っています。壁の操作のみで全てを一発で解く建築操作が高度な設計手法だと感心しました。もう少し部屋（場所）を増やし半外部空間も入れたりして面積を広くすると、より心地良い住宅になったと思います。

藤本寿徳